常温煙霧処理における施設内の拡散性②
―２種の不整形ハウス―

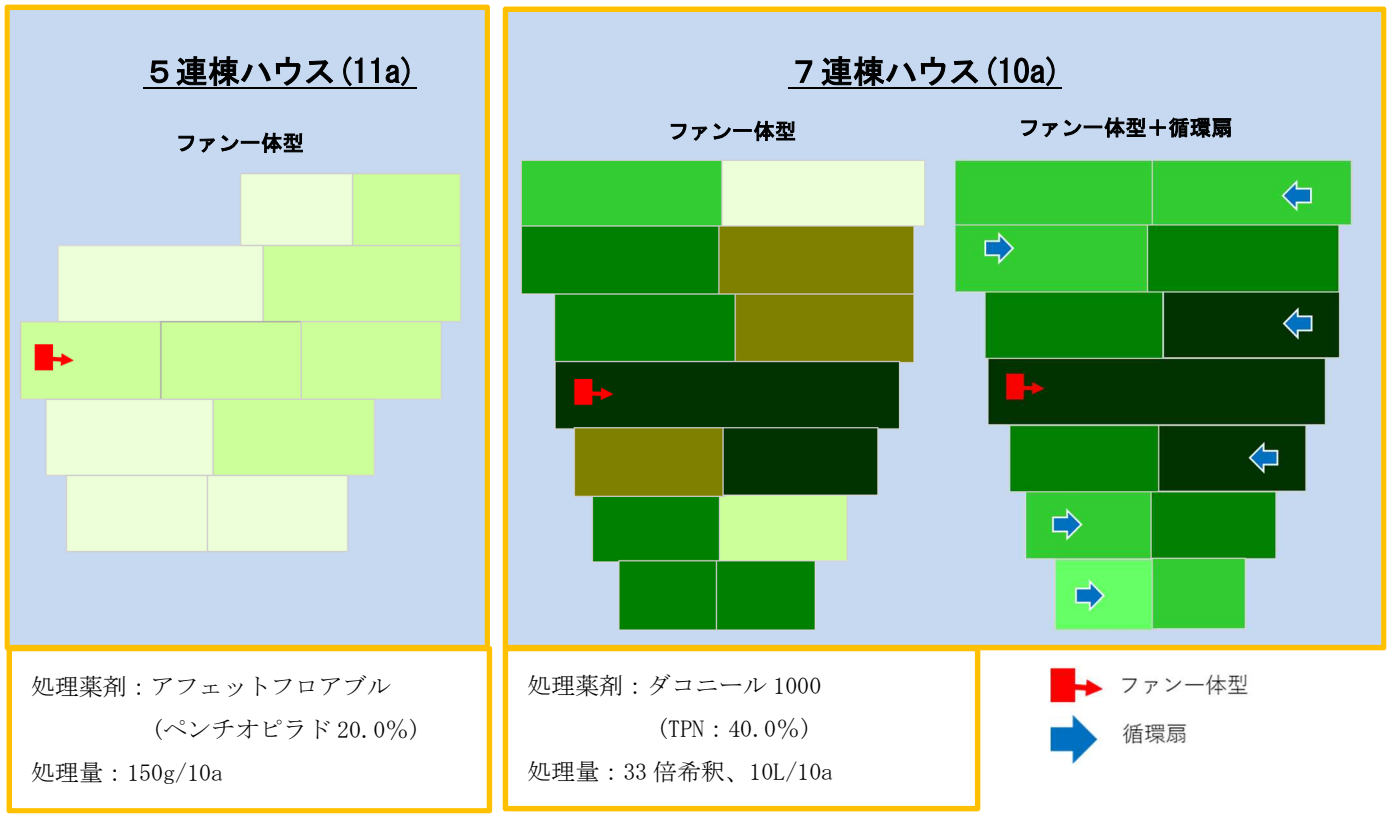
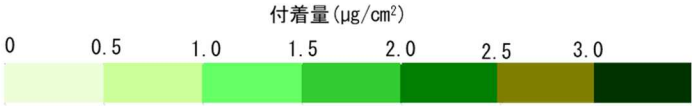


図　処理方法の違いと拡散性



センターニュース113号では、17aの整形連棟ハウスにおいて3種類の処理方法で処理した場合の拡散性を紹介しました。実際に本法を取り入れるとなると、ハウス形状は多種多様で、薬剤も複数あり、導入に至るには不安もあります。そこで、5連棟および7連棟の不整型ハウスでファン一体型を用いた試験を行いました（図）。

5連棟ハウスでは、ファン一体型（循環扇なし）でアフェットフロアブルを処理し、付着量と効果を調べました。その結果、薬剤はハウス全体に十分に拡散しており、キュウリうどんこ病に対する防除効果にばらつきはありませんでした。

7連棟ハウスでは、ダコニール1000を処理し、ファン一体型使用時における循環扇の有無について付着量を調査しました。上述の結果と同様に、ハウスの形状に関係なく全体に拡散しており、循環扇を使用することで拡散性がより向上する結果となりました。

なお、本試験は（一社）日本植物防疫協会と共同で実施しました。

（農薬管理担当　島本 文子　088-863-4915）